

CENTER NEWS

2011.8



KC&ERC

No.300





400号へ向けての雑感

情報化小委員会
委員長 小田 高幸

センターは昨年創立30周年を迎え、今年はセンターニュースも創刊300号を発行することになった。印刷の遅れなどで発刊ができないこともあった創刊初期を除き、ほぼ毎月、センターの活動を広報してきたことには、ただ、ただ感嘆の思いである。これも発刊に携わった歴代の委員やセンター職員の方々の努力に加え、ご愛読いただいている皆さんの力添えがあればこそその功績であろう。

我々、センターニュースの発行を担当する情報化小委員会では、編集作業とともに誌面に掲載するコーナーを企画している。200号以降を振り返っても数多くのコーナーを掲載してきたが、なかなか長続きしないのが悩みの種となっている。そうした中、個人的に複数号にわたって誌面を飾っていただけた方もおり、感謝の気持ちを込めてこの場で紹介したいと思う。

まず、第183号～第209号に掲載された「久丸漫遊記」を覚えているだろうか。(株)東京ソイルリサーチの田中久丸さんが、文字通り、これまでに自身が訪れた世界各地の漫遊記を綴り、かたい誌面の中にホッとする間を作り出してくれたのが懐かしい。(株)ソイルコンサルタンツ(当時)の飯野さんにあっては「男の簡単料理しま専科」と題し、22回にわたって手軽な料理のレシピを写真付きで紹介してくれた。飯野さんはこの原稿に添える写真のために、毎度、大量の食材を購入し、わざわざ食器まで購入される力の入れようであった(実は我が家のキッチンには委員の特権?で入手したあのコーナーの単行本が立てかけてある)。そして、現在も続いている「組合員技術者紹介コーナー」も忘れてはならない。某TV番組を参考に始めたコーナーではあるが、来年にはついに100回を迎えることができそうである。紹介が回って来たときのことを考えて他社の組合員と積極的に交流を持とうとする人もあったとのことで、思わぬ成果が得られたコーナーとなった(ちなみにこのコーナーの第1回は私であることがちょっとした自慢である)。この他にも、白木前所長代理の「特定有害物質ってどんな物」や澤顧問の「不確かさのすすめ」など、センター関係者によるシリーズもあった。

執筆者が積極的に投稿されたこれらの作品は今も記憶に新しく、愛好いただいた読者も多かったものと思う。本誌がこれからも発行を継続するためには、こうした組合員の積極的な参画が不可欠であり今後とも協力をお願いしたい。そして、本誌だけでなく、組合活動全般にも多くの方が参加・参画されることを併せて願う。「本組合は、組合員の相互扶助の精神に基づき、組合員のために必要な共同事業を行い、もって組合員の自主的な経済活動を促進し、かつ、その経済的地位の向上を図ることを目的とする」という組合設立当初の役割を果たすために、センターではセミナーやワイガヤ広場など新しい取組みを行っている。必ずしも期待に添える活動にはなっておらず批判の意見があることも理解しているが、実のある活動にするためにはより多くの組合員

が参画し、変化していくことが必要であろう。業界全体の余力が絞り出され、厳しい環境下での社外活動は困難が多いものと察するが、そうした状況であればこそ本組合の活動が渴いた喉を潤すオアシスになるかも知れない。

8年後の400号発行を目指して、センターの活性化に向けて、皆さんの協力を重ねてお願いしたい。

300号記念座談会

委員が語るセンターニュース



【はじめに自己紹介から】



鏡原 聖史さん

鏡原 皆さん、本日はお暑い中お集まりいただき、誠にありがとうございます。私はダイヤコンサルタントの鏡原です、2009年から情報化小委員会委員をさせていただいて、今年度で2期目に入りました。本日は、私が司会進行をさせていただきたいと思います。

はじめに、この座談会の主旨を説明させていただきます。この座談会は、センターニュース300号を記念し、情報化小委員会特別企画として、普段からセンターニュース編集に携わっていただいている情報化小委員会のメンバーの方々にお集まりいただいています。これまでの活動、企画、コンセプトさらに今後の活動について気軽に話してもらおうというものです。皆さんどうぞよろしく願いいたします。それでは、参加者の皆さんに簡単な自己紹介と、委員歴や編集に関わった感想、今後への意気込みなどを一言ずつお話しください。最初に小田委員長、お願いいたします。

小田 復建調査設計の小田です。今日集まっ

た委員の中では、私が一番委員歴が古くて、11年になります。1991年に会社の前任者から引き継ぐ形でセンターニュースを発行していた組合情報小委員会に入りました。そして、平成15年に組合情報小委員会とネットワーク化小委員会が合併した際、一番若いという理由で委員長に祭り上げられました(笑)。毎月楽しく、センターニュースの編集に参加させていただいています。

鏡原 ありがとうございます。それでは中山センター長から順に、お願いします。

中山 センター長の中山です。すべての小委員会に出るようになったのは、2007年ぐらいからです。センターニュースの編集では、いつも本田副理事長から叱咤激励をいただきまして。いかに、組合員の皆さんに楽しんで読んでいただける広報誌を作れるかと、日々思いをめぐらせております。

阪部 センターの阪部です、5年前に委員になりました。組合情報小委員会と、ネットワーク化小委員会が合併して情報化小委員会となり、小田さんが委員長に推薦されたのを、目の前で見ておりました。ご本人が「ええっ！」と大変驚いていたのが、印象に残っています。現在は、センターホームページの第1回のリニューアルに関わったこともあり、ホームページの担当もしています。

稲田 センターの稲田です、2009年4月から事務局を担当しています。今後も、センターニュースの原稿をがんばって集めたいと思っています。

山岡 東邦地水の山岡です、2009年3月に委

員になって3年目です。文章をまとめるのは苦手なんですけど、がんばりたいと思います。

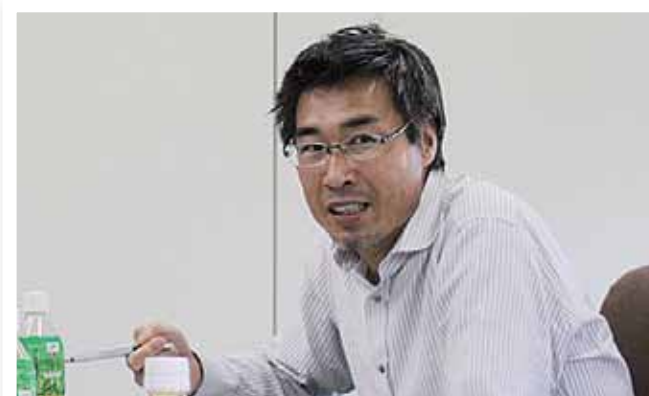
志賀 今年から委員になりました国際航業の志賀です。センターニュースの編集について、まだわからないことが多いですが、私なりに読者目線と斬新な発想で関わって行けたらと思っています。

本田 日建設計シビルの本田です、副理事長としてというより、一編集委員として参加している思いがはるかに強いです。小田委員長が先ほどおっしゃいましたように、組合情報小委員会とネットワーク化小委員会が統合されたのが、ちょうど8年前なんですね。私はネットワーク化小委員会に所属していました。統合されてからセンターニュースの編集にたずさわようになって丸8年になりました。振り返ってみると、編集をはじめた頃は40代後半で、今は50歳の半ばを過ぎました。その年齢になったから言えるのかもしれませんが、この仕事は時間の制約がそれほど強くなく、私の生活にうるおいを与えてくれる貴重なものになっています。今期、また理事を2年延長させていただいたのですが、私どもの社内規定では社外の役員は2期もしくは4年となっております。必然的に私はあと2年で理事を退任しなければいけませんし、ちょうどその時には編集員も10年になりますから、やはり区切りかなど。この2年が最後のお勤めということで、今まで以上にいろんな企画を出していきたいと思えます。

【 これまでを振り返って 】

鏡原 ありがとうございます。それでは、これまでを振り返って中山センター長から、センターニュースができた頃のことや、300号まで続いた秘訣などをお話していただきたいと思えます。

中山 歴代の表紙を資料として集めてみました、創刊期のセンターニュースは白黒で



小田 高幸さん

した。創刊号1981年12月号とありますね。これを作ったのは事務課の職員で、当時は一人で編纂していたので、発行が遅れがちだったし発行できない月もありました。1991年3月号、この頃から委員会形式になってきてたんです。カラーページができて、この辺から充実期になってきます。当時は、当センターの稲角君が毎回頑張っていました。それから森君に代わって、充実期が長い間続いていました。表紙にイラストも加わって円熟期を迎えた気がします。イラストは、手書きした原案を、プロのイラストレーターの方に仕上げてもらっていたと聞いています。

2007年代に入ってから、私も本格的に編集に参加するようになりました。その頃から表紙や記事にある写真を担当しています。写真というのは、一目見てわかる、物語がわかるのがよい写真なんです。いつもそれを理想としながら写真を撮っています。私は写真を撮り、別の委員が文章を書く事によって、レベルの高いセンターニュースができていくんだと思えます。これまでに協力して頂いた組合員の、センターニュースへの熱意を大事にしないとイケないと思えます。

鏡原 センターニュースは、最初は事務課で作られて、それが1991年ごろからの充実期に入って、委員会形式で編集されるようになったということですが、当初、委員会メンバーはどのぐらいの人数だったのですか？



中山 義久さん

小田 合併した時は多かったですよ、委員11人と、センターの方が2、3人いました。でも、実際に委員会に出てくる人数は、今と変わらないですね。5、6人で、交互に参加してる感じでした。

〈これまでの企画とコンセプト〉

鏡原 ありがとうございます。それでは、これまでの企画とコンセプトについて中山センター長から、引き続きお願いしたいと思います。

中山 資料を見ると、一番回数の多い企画が「技術者紹介コーナー」の81回。これはセンターの職員抜きで、組合員の技術者さん同士のつながりで続いています。始まった頃の組合員は50数社あったはずなんですが、81回というのは、組合員の数より多いんですよ。組合員以外の会社の技術者の方々も紹介されて載っていたのかもしれない。そういう技術者同士のつながりは、まだまだ捨てたものじゃないと思います。このように、組合員参加型の企画が長続きしているような気がします。

鏡原 私が企画した「携帯フォトコンテスト」も、なかなか写真が集まらずに企画倒れになってしまったんですけど。組合員を巻き込む企画は難しいですね。

阪部 あれは予算の問題もあったんです。カラーページがすごく高かったんですね。

鏡原 予算の問題もあったのかもしれませんが、組合員参加型の企画でやはり、写真が集まらなかったのが残念だったなあ。

さて小田委員長、現在の委員会活動の様子、センターニュースが作られるまでの工程や、この10年で印象深かった企画などをお話していただけますか。

小田 皆さんご存知のように我々の小委員会は、センターニュースの発行のために、月1回の活動を行っていきまして、これまで毎月絶やさず発行を続けてこれたことはよかったと思っています。苦労というほどの苦労はありませんけれども、理想と実際に出来上がったものとの差に、ちょっとはがゆく思うことがありますね。

200号前後から300号前後までの企画を見ると、どれも甲乙つけがたくて、面白いものが多いのですが、なかなか原稿が集まらないのが悩みの種です。その中で続いている企画は、委員自身がコーナーを持って自主的に原稿を書いてくれるものや、「技術者紹介コーナー」みたいなものです。企画を考える上ではどうしたら原稿を集められるのか、それが一番のポイントですね。委員会に入った頃は、原稿が集まらずに結構委員が持ち廻りで書いていました。委員長と目が合うと「小田さん、来月号の…」と言われるので、目を合わさないようにしていました(笑)。今はできるだけ、自主的に投稿いただけるようにと思って原稿を集めています。

鏡原 ありがとうございます。次は本田副理事長に、センターニュース発行の目的と、伝えたいこと、基本コンセプト、などをご説明いただきます。よろしく願います。

本田 私が編集委員会に入った頃には、小田委員長が中心になって、センターニュースの編集が進められていました。センターのホームページとセンターニュースが2本立てで、これを柱に、組合員外にもいろいろ情報発信して、仕事を取ろうじゃないかと…。そんな考えはありましたよね。どちらかというとホームページの意識が強かったんですが。だから、最

初の頃は、組合員外にも読んでいただけるような企画もあったんだけど、なかなか思うように原稿が集まらず、だんだん変わってきて今の形になりました。

皆さん、このセンターニュースに対して、それぞれの思いはあるでしょうけれども、私は自分で書きたいこと、好きなことを書ける場がいいんじゃないかと思います。『外から原稿を集める』というコンセプトではなく、『自分たちの思いのたけをどんどん発信できる場』『エッセイでも写真でもOK』というような、皆の広場みたいなもので良いと考えるようになりました。

〈センターニュースとホームページ〉

鏡原 ありがとうございます。私も今日初めて編集委員会の成り立ちや発行の目的を知ったんですが。組合員外から仕事を取ろうとする目的も含まれていたというのが驚きでした。これまで、組合員のための情報誌だと思っていましたから。

中山 それは、時代時代で変わっています。センターニュースやホームページは、組合で決まったことや、組合のサービスなど、組合員向け情報として定期的に出さなくてはなりません。先ほど本田副理事長がおっしゃった、ホームページで仕事が取れないかと思ったという話ですが、今はインターネットでかなりの情報がとれますよね。「土質試験」で検索すると、組合のサイトよりも、大学教授のサイトやコンサルタント会社のサイトの方がヒットする可能性が高いんですよ。

検索でセンターがヒットして、組合員外の人が「こんな企業があったのか」と興味をもって受注に結びつく…。そんなに期待はしてないですけども、そういう組合があると知ってもらえるだけでもプラスになると思います。うちのサイトが、今の情報化社会の資料ツールとしての役割を果たしているかという、ちょっと弱いかなという気もするのですが、そういう面でも今後、強化していき



阪部 秀雄さん

たいです。

鏡原 現在のセンターニュースの位置付けとしては、組合員向けの情報ということですね。

中山 そうです。組合員に知らせなければいけない情報、講習会や見学会の案内や理事会や総会の報告など。それは創刊期も一緒だったと思います。それ以外に、何かを求めていたんじゃないかと。ホームページを受注ツールとして位置付けるのだったら、もっと検索でヒットする工夫が必要ですね。土質試験に関することは、ここに全部載っているとされるほどになるには、かなり情報を詰め込まないといけないですが。

阪部 センターニュースもホームページと同じように、外からも仕事をとりましょうということで、試行錯誤した時期があります。本田副理事長がおっしゃったように情報小委員会とネットワーク化小委員会が合併した時に、センターニュースとホームページを一緒に更新しようという話が出たんですね。これからは、できるだけペーパーレスにして、情報をホームページに集約しようとしていたのですが、それが滞っていて、ホームページとセンターニュースの役割が今一つスッキリしていないのが現実のようです。

鏡原 元々は別々のものだったのが、合体して両輪で一緒にやっというとしたわけですね。ホームページの運営更新とセンターニュースと連動した情報発信がなか



山岡 哲夫さん

なかうまくいかなかったけれども、センターニュースは毎月きちんと発行できているわけですね。意識的に組合員に発信すべき情報とプラスアルファで、みんなにお知らせしようという内容になっているから、継続的に毎月定期発行できているということですね。ただ、センターニュースとの連携は、今後の課題になりますね。

では、3年目の委員、山岡さんに西形先生への取材企画のときのお話お聞きしたいと思います。

〈思い出の企画と、新企画〉

山岡 私は考古学が大好きなんです。2年ほど前のことですが、当時エジプト探検隊が話題になっていて、ピラミッドの保存調査から帰ったばかりの、関西大学の西形先生から話をうかがう企画を立てたんです。日本の考古学と外国の考古学の学者がチームを組んで、遺跡の調査をする苦労や、文化財の保存について取材しました。日本と外国の考え方の違いや、文化財修理の仕方の違いなど、興味深い話をたくさん聞かせてもらって、勉強になりました。またこういう企画を立てて、取材して、組合の皆さんの役に立つ情報を発信していきたいと思います。

中山 あれは面白かったけど、準備が大変だったんじゃないですか。

鏡原 そうですね。事前に委員長と西形先生に企画の主旨説明と日程調整などの準備を行い、そのあと本番の取材という段取

りで行いました。大学の先生は、現場の人とは発想が全然違うし、最先端の知識も豊富ですから、大変面白い企画だったと思っています。今後もこういう企画を立てたいですね。

阪部 私も委員になって以来、毎月編集に参加していますが、どの企画がいい、どの企画が悪いというものではなくて、それぞれに充実した企画だと思うんです。今センター長からお話が出ましたけど、ホームページで紹介した技術の話を、センターニュースでもコーナーを作って書くといいかもしれません。例えば、私の部署だったら、環境分析になりますか。技術屋集団らしい企画、そういうものがあればいいなと思います。

鏡原 「技術シリーズ」、面白い企画ですね。

稲田 私が入った当初にあった企画は、ことごとくなくなってるんです。「携帯フォト」とか「西形先生の“この人に聞く”」とか。ちょっと残念な気がします。

鏡原 「携帯フォト」は私の企画でしたが、また復活させたいですね。写真の企画は評判がいいみたいなので、広報の仕方を工夫して、たくさんの人に投稿してもらいたいですね。

山岡 今はカラー写真も安く印刷できるようになりましたから、復活させましょうよ。

鏡原 あれは募集のタイミングが難しくて。センターニュースに掲載される季節にタイミングよく募集できないという問題があるんですね。載った時はシーズンオフだったりして。

中山 季節をテーマにせずに募集するといいいんでしょうが。

鏡原 テーマを上手く考えて、募集することによって「携帯フォト」の企画を復活させられそうですね。がんばろう。

志賀 委員会の参加は、本日で3回目になります。以前はセンターニュースが届いても、表紙を見て、興味のある記事を読んでいたように記憶しています。その中でも、これまでの企画で、目に飛び込んでくるような特色あるものがあまり無かつ



志賀 直樹さん

たような気がします。今までのセンターニュースは、対外的なアピールと組合員同士の情報交換の場という、どちらが主体なのか明確じゃなかった。

一度、今回を機にセンターニュースのコンセプトをしっかりとさせた上で企画すれば、編集委員の思いも組合員の皆さんに伝わっていくんじゃないかと思えます。

センターニュースが300号まで続いたのは、その時々編集委員会の強い思いがあったからこそで、今後においても、続けようという意思が大事ですね。

【これからへの想い】

鏡原 ありがとうございます。ここまで委員会活動の変遷やセンターニュースの歴史、今までの企画とその問題点などをご説明いただきました。どちらかというと、センターニュースは組合員向けですね。でも、委員が楽しんで作ってれば、組合員も積極的に参加してくれるんじゃないかと思えます。後半は、これからのセンターニュースについて、それぞれの思いを語っていただきます。まずは委員長、お願いします。

小田 広報として考えると、組合員の紹介や講習会、見学会だけで考えるだけでなく、他の委員会活動の紹介とか、センターの紹介など、発信すべき情報はたくさんあります。後は本田副理事長も言われたように委員が好きなことを書く、

それも大事なことだと思うんです。編集委員としてではなく、一組合員として書く。誰かを指名して「書いてくれ」じゃなくて、組合員自らが書きたいことを書く。そういう場であるべきです。我々は組合の代表でもありますから、我々が楽しめないと組合員も楽しめないと思うんですね。みんなが楽しめる企画を作っていきたいものです。

鏡原 ありがとうございます。センターニュースの中に、他の委員会の活動紹介をという意見が出ましたが、他の委員会のイベントを紹介する時に、それが決まっていきさつなどを入れるといいかもしれませんね。

小田 本当に必要なイベントなら、組合員が自発的に参加できるように積極的に広報するべきでしょう。各委員会が連携して、センター全体としてやる方がいいでしょう。

鏡原 なるほど。各委員会との連携。いいアイデアですね。

中山 そういえば、『地盤工学会誌』と全地連の『地質と調査』について、ある人と話していたら、その会社では『地盤工学会誌』よりも『地質と調査』を見るらしいです。『地盤工学会誌』は技術論が中心で、取っ付きにくいらしいです。『地質と調査』だと、専門家の方々の話から「私の経験した現場」なんてコーナーまで、結構幅広く企画を持っていて、内容が我々にも分かりやすい。

まず表紙が違います、『地質と調査』は写真がベース。『地盤工学会誌』はマークとかロゴ。志賀さんがおっしゃられているように、表紙で読まれるかどうか決まるようなところがあるかもしれません。表紙にいかにか委員の思いを込められるかどうか、そこがポイントですね。センターニュースでは、似た企画が多いような気がします。編集委員だけでは、なかなか斬新な企画が出ないようなので、センターの方からも知恵を出したいと思います。

鏡原 組合員から企画を募集してもいいかもしれませんね。

中山 組合員から企画を募集することに関し、センターでは昨年度30周年記念誌を作成し、組合員の皆様方にお配りいたしました。この30周年記念誌は職員全員参加型ということで、創りました。行動をおこさないと結果は残らないです。だから積極的に参加させました。そここのところを見て頂きたいと考えています。



稲田 朋子さん

〈技術的な企画も必要〉

阪部 センターからの情報発信として、職員が自分の持つ技術をセンターニュースに出していくことも重要だと考えます。つまり、センターは技術屋集団であり、高い技術を持っているということを前面に出して、センターニュースをアピールする場に活用したいですね。

鏡原 センターの技術について書くということですね。

阪部 難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白くのような感じのものを、何か企画したいですね。

鏡原 では、その企画は阪部さんをお願いしますということをお願いします。稲田さんはいかがですか。

稲田 「ちょっといい話」コーナー以外にも、センターの職員に原稿を書いてもらえるものを作れたらいいなと思いました。がんばります。

山岡 私は営業職なんですけど。設計書の土質試験の項目で、「建設物価」で名称を調べても、詳しく載ってないものがある場合があります。たとえば三軸圧縮試験とか。そこで、営業担当者にもわかりやすい用語解説を、写真入りで載せてもらえると、お客さんの質問に答えられるので助かります。毎月シリーズで載せる形にしていただければありがたいです。

中山 最近、そういう技術的な質問が、よくセンターにきます。例えば、今後のセンターニュースで「岩石のスレーキング試験」についての解説掲載を予定していま

すが、こんな形態でシリーズ化して続けていくといいのかもしれない。

鏡原 大変いい企画が出ました。それを数回分集めて別冊にまとめるのもいいですね。志賀さんはどうですか。

志賀 地盤環境研究センターの位置付けをはっきりさせた上での企画が必要だと思います。試験の実施機関であり、試験に関するコンサルタントとして、土質試験の方法や制度などをわかりやすく説明する企画や、試験に関する裏話(センター側からの意見や愚痴)などを公開していくことも、一つの企画では？

また、組合員の社員の方は近畿各地に出張していることから、例えば、地域のグルメ情報や観光情報など、写真入りで紹介していけば組合員に役立つ情報になると思います。それと、このご時世です、東北地方への応援として、例えば、組合員の中でも東北出身者や大学・会社の転勤等で東北にゆかりのある人はいらっしゃると思います。そういう人達が思いを綴っていくことで、組合全体に“東北を支える”雰囲気をつくる企画とならないかなーと思っています。

鏡原 これでまた企画が二つ増えました。現場のグルメや観光情報を集める企画。そして「がんばろう東北」。ありがとうございました。では、本田副理事、一言お願いします。

本田 ちょっと反省すべき点がありまして。「ワイガヤ広場」の企画、これは続いているんですね。でも酒飲みの会になってし

まっています。会社の壁を越えて楽しく盛り上がっているのは良い事ですが、若者がこの「ワイガヤ広場」に出ようとすると、上司を説得しなきゃいけないわけです。でも、今の「ワイガヤ広場」では、上司を納得させられません。技術志向が足りないから。

そういうことを考えると、決して小難しくはないけれども技術志向の企画と、ソフトな組合員のふれあいの企画と、両面がないとなかなかうまくいかないと思うんですよ。試験を本業とする研究センターの会報としては、技術志向の企画が必要。続いていく企画、解説もいいんですが、種々の、多くの疑問点から出された試み(試験)にトライして結果を皆で考える場というような、そういう工夫が必要でしょう。

鏡原

センターの方に積極的に参加してもらって、実験的な試験をしてもらって、その結果を報告してみんなで考える企画なんかもいいでしょうね。今日はたくさん新しい企画が出ました。さて、最後にセンター長、一言お願いします。

中山

これからセンターとしてやっていく方向と、組合員の皆さんのやっていきたい方向を一致させるような広報誌、あるいは技術論誌に。肩のこらない内容だけど、ちょっと頭に残るようなものにしたいで



本田 周二さん

すね。

センターニュースは「センターの広報と活性化」「組合員の交流促進」「支援サービス事業の一環」「委員の皆さんの協力・経験」などの重要な目的を持って、今後も続けていかなければなりません。そして「現状を伝える」「読むのが楽しみ」「参加したくなる」「役に立つ・おもしろい」などを実現しなければならないと思っています。そのための新たな提案や意気込みを聞かせてもらったので、心強く・続ける勇気をもらいました。

鏡原

今日は長時間でしたが、編集委員みずからが、どんどん新しい企画を出したよい座談会だったと思います。どうもありがとうございました。

参加者

委員長	小田 高幸	復建調査設計(株)
担当理事	本田 周二	(株)日建設計シビル
委員	山岡 哲夫	東邦地水(株)
委員	鏡原 聖史	(株)ダイヤコンサルタント
委員	志賀 直樹	国際航業(株)
委員	阪部 秀雄	(協)関西地盤環境研究センター
事務局	稲田 朋子	(協)関西地盤環境研究センター
オブザーバー	中山 義久	(協)関西地盤環境研究センター



300号までのタイトルと表紙

シリーズタイトルで振り返る

センターニュースでは、読む楽しみや、技術論、体験記などをシリーズとして連載してきました。長く続いているもの、短命に終わったものなど様々ありますが、委員会の苦勞の跡が伺われます。ここでは、代表的なタイトルをご紹介します。

❀❀ 新企画 ❀❀

“組合員技術者紹介コーナ” (第1回)

現在も継続している最長寿企画
(81回)

第1回
ゲータイフオホモテス

予算の関係もあって？
短命に終わった企画
(4回)

series

不確かさのすすめ⑪

センターらしく、
技術企画の一例
(12回)

「平成18年度若手技術者交流会」に参加して

お知らせの定番、
行事の参加記録
(都度掲載)

<試験立会・見学会の記録>

センターの底力をお見せしています
(都度掲載)



男の簡単料理しま専科 (その20)

自主投稿の代表格、
実益もあり楽しい企画
(22回)

🏠●🏠●「我が社・我が街」(第21回) 🏠●🏠●

各社がどんなところにあるのかを知ることが
できました (55回)

ペットのつぶやき (第21回)

ペットも家族、
力作が続きました
(21回)

私の趣味「城廻り」

「相互扶助の精神」は、
まず人を知ることから
(26回)

表紙でふり返るセンターニュース

創刊 300 号を迎え、センターニュースの顔となる表紙の変遷をまとめてみました。創刊号（1981 年）から直近（2011 年）までからピックアップしました。なお、13 ページ～15 ページは「創立 20 周年記念誌」よりそのまま転載しました。さらに現在までを追加掲載しています。

創刊より約 10 年間のものは事務課で作成した簡単なモノクロ印刷でした。1991 年ころより小委員会として組合員の協力を得たもので、あわせて、カラー印刷となりました。さらに 2000 年 4 月より A4 版化の流れに習い誌面が大きくなり、その後数回のデザイン変更を受け、現在に至っています。

いつの時代でも表紙のデザイン、写真選定に先達の熟考・工夫の汗跡が伺えます。やはり、センターニュースの表紙と言えばセンターの顔です。これからも、“これは”と思われる表紙案がございましたら、ご提案頂ければ幸いです、組合員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

関連として、これまでに発行した記念誌の表紙を並べました。



【センターニュース 20 年の変遷】

組合員への情報誌として発刊しておりますセンターニュースも皆様のご投稿を頂き、1981年12月号発刊以来20周年を迎え、組合関係各位の皆様方に厚くお礼申し上げます。

このページでは創刊号から現在まで（2000年）発刊してきたセンターニュースの表紙になりました阪神大震災、事務所移転、イラストなどを一部掲載致しました。ぜひご覧下さい。

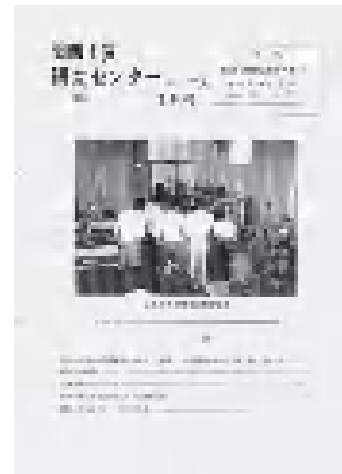
今後もセンターニュースをご愛読頂きますとともに組合員皆様のご協力の程をお願い申し上げます。



センターニュース創刊号
(1980年10月営業開始)
1981年12月発刊



奈良県自然災害での写真
1982年8月発刊



土質試験講習会の状況
(三軸圧縮試験実習)
1983年7月発刊



メキシコ大震災で崩壊した
ソカロ広場に面する建物
1985年10月発刊



関西空港など関西圏のビックプロ
ジェクト着工が増加した新聞記事
1987年1月発刊



完成した瀬戸大橋
(4月10日開通)
1988年12月発刊



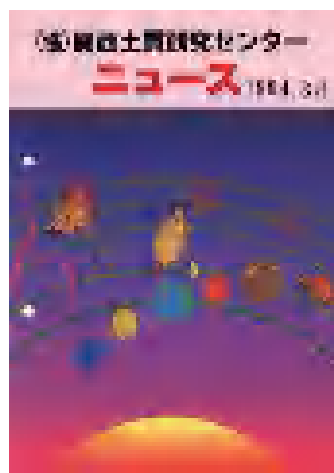
不攪乱試料密度測定グラフ
1989年1月発刊



関空、明石大橋など関西の
交通便が増えつつある様子
技術・情報小委員会一同作
1991年3月発刊



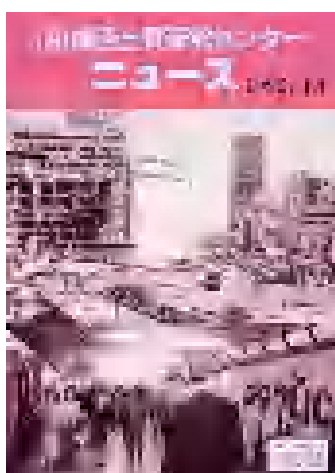
宇宙人が地球を覗いている
梶谷エンジニア(株) 設計部女子社員一同作
1993年3月発刊



「土」の響きが宇宙を奏でている
中央復建コンサルタンツ(株) 金子氏作
1994年3月発刊



兵庫県南部地震で断層が地表に
表れた状況(淡路島 北淡町)
明治コンサルタント(株) 青木氏撮影
1995年1・2月発刊



震災後の三宮駅周辺と地下街
中央復建コンサルタンツ(株) 中廣氏撮影
1995年5月発刊

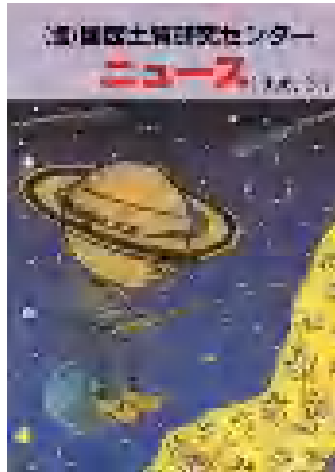


阪神高速3号神戸線の復興作業
(協)関西土質研究センター 稲角氏撮影
1995年10月発刊



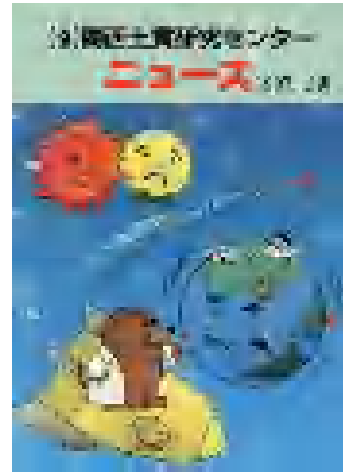
発行 15 周年記念号

1995 年 12 月発刊



天の川で釣りをする土星
「じたばたせずに好機到来待とう」

明治コンサルタント(株) 谷口氏作
1996 年 3 月発刊



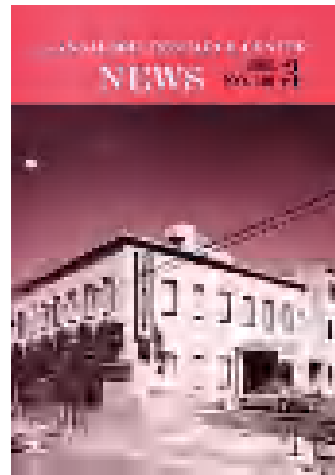
地球を心配する太陽と月と
地質調査技術者のモグラ

協関西土質研究センター 稲角氏作
1997 年 3 月発刊



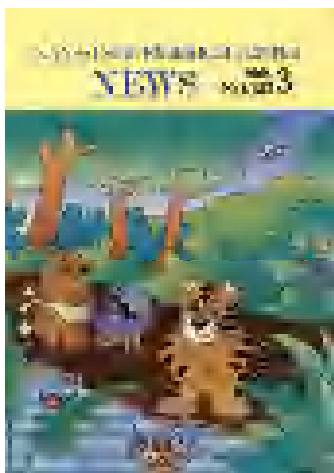
大阪モノレール開通

1997 年 8 月発刊



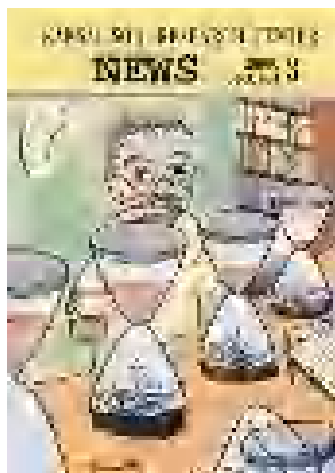
新社屋全景の表紙

1998 年 3 月発刊



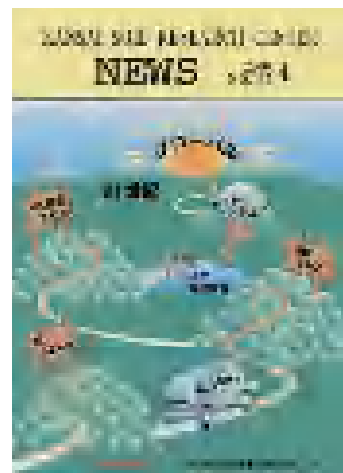
なまずを飼い慣らすモグラと虎
(地震を予知し、対応策を取る)

協関西土質研究センター 山口氏作
1999 年 3 月発刊



金の字には土が隠れている
「土は金なり」土に感謝

中央復建コンサルタンツ(株) 本多氏作
2000 年 3 月発刊



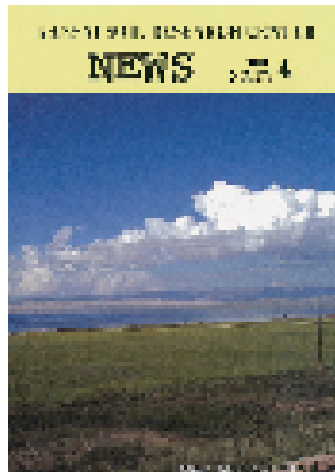
21 世紀と土質に関連する山や池
(株)ソイルコンサルタンツ 島津氏作

(A4 サイズに変更)
2000 年 4 月発刊

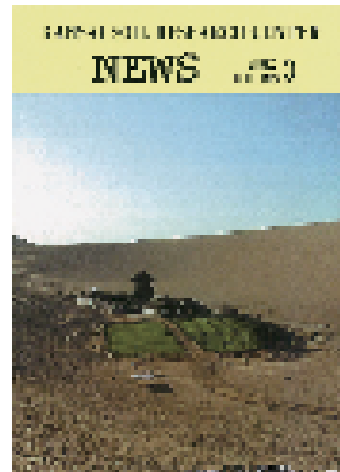
20年からの変遷



2001年1月～3月
20周年記念事業 特集号



2001年4月
中国の風景シリーズ (初)



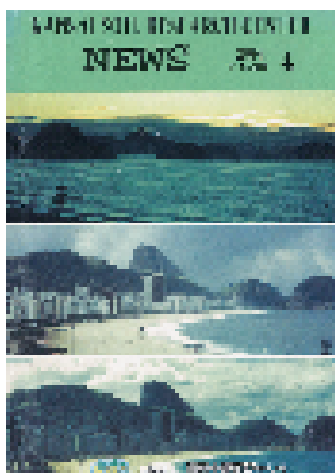
2002年3月
中国の風景シリーズ (終)



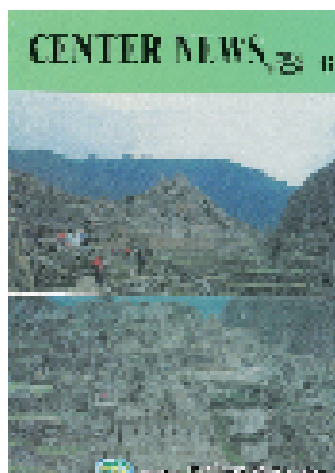
2002年4月～2003年2月
イラストシリーズ



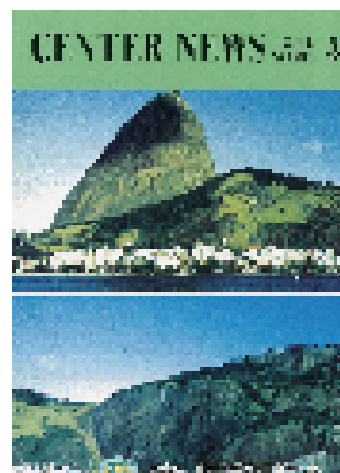
2003年3月
200号記念特別号



2003年4月
海外の名所シリーズ (初)



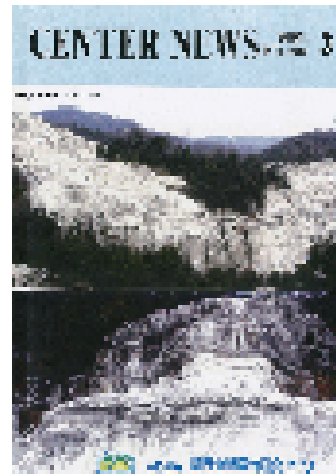
2003年6月号
名称が関西土質研究センターから
関西地盤環境研究センターに変更



2004年3月
海外の名所シリーズ (終)



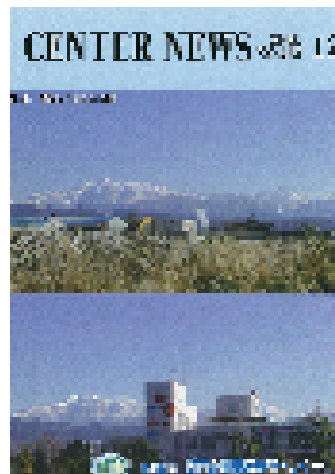
2004年4月号
近畿の珍しい地質・地盤シリーズ(初)



2005年3月号
近畿の珍しい地質・地盤シリーズ(終)



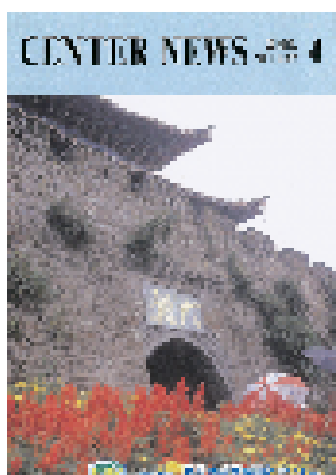
2005年4月号
組合員提供写真シリーズ(初)



2005年12月号
創立25周年



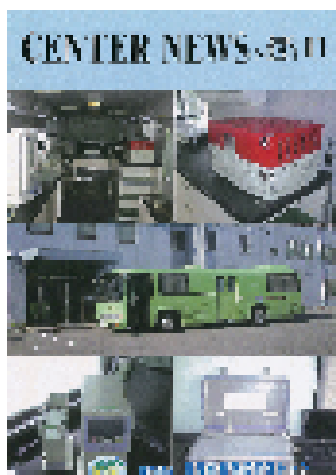
2006年3月号
組合員提供写真シリーズ(終)



2006年4月号
中国の風景シリーズ(初)



2006年10月号
中国の風景シリーズ(終)



2006年11月号
センターの試験設備シリーズ（初）



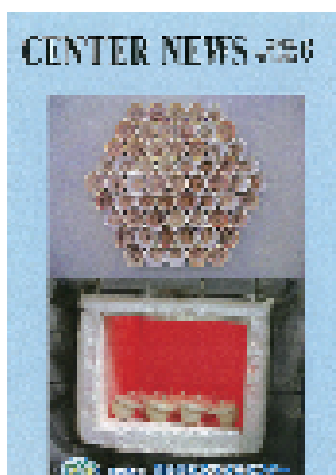
2007年4月号
センターの試験設備シリーズ（終）



2007年5月号
欧米諸国の風景シリーズ（初）



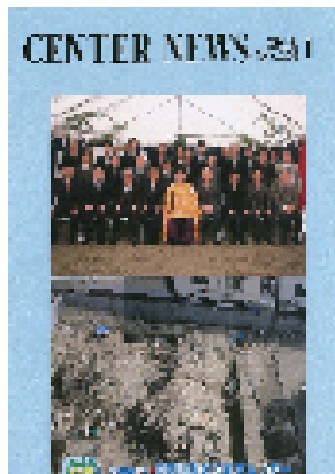
2008年3月号
欧米諸国の風景シリーズ（終）



2008年4月号
センターの実施試験シリーズ（初）



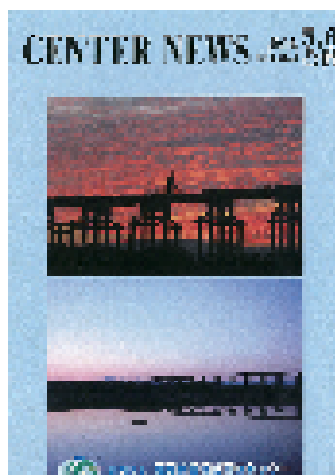
2008年12月号
センターの実施試験シリーズ（終）



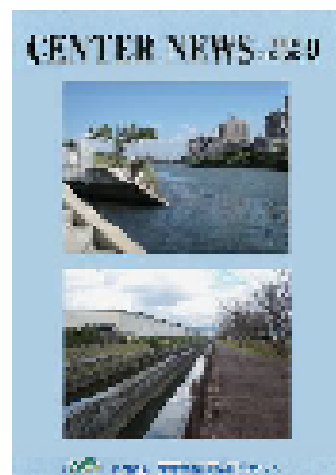
2009年1月号
C棟建設記録シリーズ（初）



2009年4月号
C棟建設記録シリーズ（終）



2009年5・6月号～
土木構造物シリーズ（初）



2010年9月号
表紙旧デザイン
最終号



2010年10月号～
表紙・内容を一新



2010年12月号
創立30周年



2011年5月号
直近の表紙

————— なんとピッタリなオレたち? —————

新企画【自慢好学会の井戸端自慢】

記念すべき 300 号をむかえ、“リラックス”をコンセプトにした投稿コーナーを企画しました。昨年発足した NPO(なんとピッタリなオレたち)自慢好学会の自慢紹介コーナーですが、井戸端会議のノリでエッセイ、写真など時々で気づいたことなどを気軽にお寄せ下さい。



● つぶやき自慢：通勤風景その1

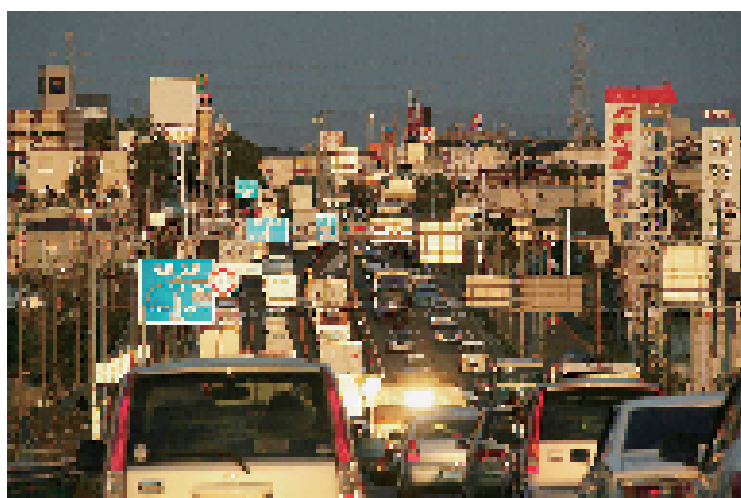
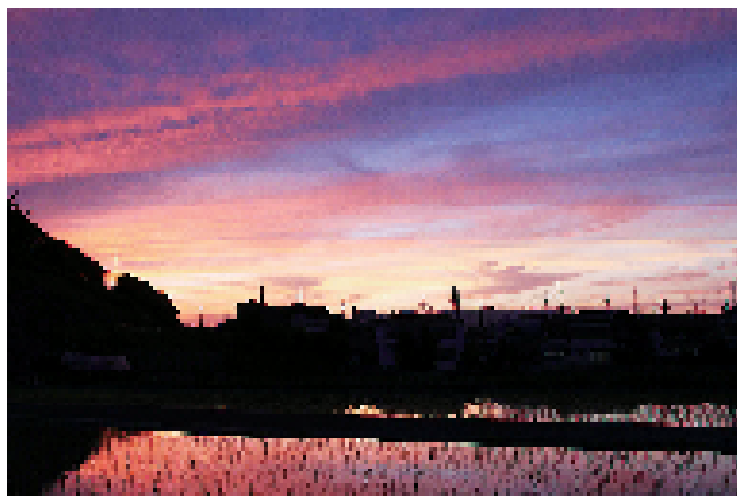
私は始業時間よりかなり早く会社にたどり着く。従って、自宅が出るのが早い。さすがに新聞配達の少年(?)を見かけるほどではないが、野球の早朝練習によく出くわす。その親子を初めて見たのはもう数年前になる。小学校の低学年のようにみえた男の子は、最初はバットを振るというより、振ったバットに振り回されるといった印象であった。男の子は今では高学年になっていよう。お父さんの投げたボールを実に上手くミートできるように上達している。何事によらず、やはり訓練というものは正直に結果を返してくれる。継続は力なり。誠にその通りである。この年であらためて実感するのも結構新鮮であった。〈SH〉



●素描・カット&ペースト自慢

自宅横で撮影した、枚方の夕暮れ。やがて暑く粘りつく夏の到来の予感。

(平成 23 年 6 月 14 日撮影)〈YN〉



秋の国道1号線 菊丘～天の川間、
普段何気なく見ている景色でも、
夕陽の方向・角度で印象が一変
します。

(平成 22 年 11 月 28 日撮影)〈YN〉



投稿、お待ちしております！！



所 属：株式会社 中堀ソイルコーナー
氏 名：谷口 清（たにぐち きよし）
出 身 地：大阪府大阪市
生年月日：1965年7月18日

株式会社アテック吉村の高浦さんからご紹介頂きました、株式会社中堀ソイルコーナーの谷口と申します。入社して25年以上、土質・基礎関係一筋に勤めて参りました。

紹介して頂いた高浦さんには20年以上前からお世話になっていて、私の方が年上なのですが、彼は現場作業の解らないことがあれば親身に相談に乗って頂ける、優秀なボーリングのオペレーターです。

私の簡単な自己紹介ですが、大阪市大正区生まれ、家族は、妻と2人の息子（高校2年と中学1年）と金魚が3匹です。また学生時代は吹奏楽部に所属していて、柄に似合わずフルートを吹いていました。

今回、なにを書こうか悩んだのですが、執筆のテーマは自由ということなので、25年ぶりの吹奏楽部の同期会について書かせて頂きます。

私が学生時代に所属していた吹奏楽部は毎年1回ホールを貸し切り、今でも定期演奏会を催しているのですが、久しぶりに後輩たちの演奏を聴きに行った時のことです（後輩と言っても、現在は自分の子供と同じくらいの年齢なのですが）。同じく演奏会にきていた同期の友人数名と卒業以来の偶然の再会となり、「他の者はどうしている？」、「みんな元気になっているかな？」と演奏会そっちのけで昔話に花が咲き、「25年を記念して、同期会をしよう！！」と盛り上がりました。その時は、全く他人事のように思っていたのですが、誰からも何の連絡もなく1年が過ぎたころ、友人から届いた年賀状に、「同期会幹事よろしく」と書かれてしまい、いつのまにやら、私が幹事として25年ぶりの同期会を開催することになったのです。

まず手始めに卒業時の3年生部員20人（男ばかりですが）の連絡先の確認を行うこととし、ホコリだらけの古い卒業名簿を押し入れから引っ張り出し当時の自宅へ電話連絡したり（突然の電話に不審がるご家族多数!）、年賀状のやり取りをしている者から情報を聞きだしたりと、1か月余り苦労して探した結果19名までの連絡先は判明したのです。しかし、A氏の所在だけが、四方八方に手をつくしたのですが、どうしてもわからず、手も足も出ない状態になってしまったのです。

「これは無理かな」と諦めかけていた時、妻から「名簿に記載されている卒業時の勤務先へ直接連絡をとってみたら？」の一言により、さっそく彼の勤務先（某使い捨てカイロ製造会社なの

ですが)へ電話連絡を取ってみたのです。ところが、人事部からの返答は「そのような個人情報についてはお答えしかねます」と丁寧に断られる始末。個人情報保護法の厚い壁にぶち当たってしまったのです。まあ、当然の反応であるものの、別の策を考える必要があると悩んだ結果、「現在も在籍しているのであれば、彼から直接連絡を貰えれば良いのだ」と思いつき、こうなったら・・・と、同社のお客様相談室に手紙を出すことにしたのです。見ず知らずのお客様相談室の担当者に、泣きつくような手紙を書き、A氏宛ての同期会の案内状を、渡してもらえるようお願いしたのです。その後、1週間が経過し諦めかけていた時、A氏よりメールで「ぜひ参加したい」と連絡が入ったのです。これにより20名全員の所在が無事判明したのです。

当日は遠方の者や仕事の都合がつかない者などがいて、結局参加者は13名になってしまったのですが25年ぶりの再会は、楽しい一時となり、誰もが、学生気分のままに大いに盛り上がり終了しました。

さて翌日、二日酔いの重い体にムチを打ち、撮影した写真をパソコンで整理していた時のこと、通りかかった妻がその写真をのぞきこんで、「なんか、男ばかりでむさくるしーなー、みんな昔はもっとカッコよかったのに…」と一言。そう言われて、よくよく見てみると、あんなに痩せていたのにどないしたらこんなに太れるんやろと思う者や、他校にはファンクラブもあり部内で一番カッコ良かった者においては、頭の上が非常に寂しい焼け野原状態に変化しているなど、それは、『ただの酔っぱらったグデングデンのおっさん連中の写真』でしかなかったのです。

次回予告

次回ですが、お世話になっている有限会社ジオ・ロジックの浦田さんをご紹介します。

開催案内

多数の方々の参加をお待ちしています

「育児・介護休業規程マニュアル」説明会 開催のお知らせ

「改正育児・介護休業法」が、平成22年6月30日から一部を除き施行されています。

センターでは、「中小企業人材確保推進事業」の一環として『育児・介護休業規程マニュアル』を作成し、組合員の方々に配布します。今回の育児介護休業法の改正は、新しい制度の導入など、かなりのボリュームの改正です。中小企業には関係ないとお考えの方もいるでしょうが、除外や猶予はあと1年しかありません。

育児休業や介護休業などは、今や、女性労働者だけでなく、男性労働者も取得する時代になってきました。この法律は、子育てや介護期間中の働き方を見直し、仕事を続けやすい仕組みづくりと父親も子育てや介護ができる働き方の実現を目指したものです。会社がこの休業等をもっと理解することで、従業員からみれば、育児休業や介護休業等がとれる、長く安心して勤められる会社にすることができるでしょう。

今回は、専門の方に分かりやすく解説していただき、理解を深める場にしたいと思いい下記のとおり企画しました。経営者・人事担当者、さらには直接的にもっとも関係する管理職の方々の参加を期待していますが、一般社員の方を含めた多数の参加をお待ちしております。

又、年金事務所・ハローワーク等への手続関係及び育児・介護休業給付金等についても、説明して頂く予定にしております。

記

テーマ：『育児・介護休業規程マニュアル』の活用について

講師：ヒロセ社会保険労務士事務所 特定社会保険労務士 長谷 和弘氏

日時：平成23年8月30日 16:00～17:30

場所：大阪キャッスルホテル<天満橋>

参加者対象者：組合員企業の関係者（ひとりでも多くの参加を願います）

ビール片手に、ワイワイガヤガヤしませんか!?

【アフター5 ワイガヤ広場】開催報告 (No.18)

組合員の素朴な疑問解消あるいは自分はどう思っているが他の人の意見を聞きたいなど、気軽な学術の場を提供することがワイガヤ広場の主旨です。最近のワイガヤ広場はただの飲み会?とのご意見もありますが、今回は当センター西田顧問に「甲府城稲荷櫓」の修復から完成までの過程、および歴史学と地盤工学が融合した調査がいかに重要であるか、またその調査結果が修復計画・施工に反映され、後世に残る成果となるという貴重なお話を伺いました。当日、ワイガヤ広場は幸運にも2つの小委員会開催日と重なり、総勢40名弱の参加者を得ました。

西田先生のお話が続いて、暑気払いを兼ねて恒例?の乾杯に引き続き、皆さん大変リラックスした雰囲気の中、技術者同士の話も弾みまさにワイガヤ化しました。また、この日参加頂いた組合員技術者とセンター職員の交流も進み、大変有意義な機会となったことを報告いたします。



西田顧問の講演



歓談中の様子



参加の面々



次回開催案内

次回：開催場所：センター会議室

開催日時：平成23年8月23日 午後5時から

連絡先：Tel：06-6827-8833 E-mail：jyoho@ks-dositu.or.jp

参加費：¥500/人（ビール代 つまみはセンター供出）

（文責 広場管理人代理 中山）

こんな時代だから、 ちょっと心に残る良い話

3・11からもうすぐ5ヶ月を迎えようとしています。未だに被災地は瓦礫の山、そして腐敗臭によりハエなどの虫が大発生しており、自衛隊が駆除作業に入っています。S専務理事から本を1冊お勧めして頂きました。その中に載っていた文を掲載したいと思います。

(稲田 記)

【原発の父が支え】

福島市高湯温泉の旅館の一室で、南相馬市原町区から避難してきた玉川知史君（17歳）は父茂男さんに電話をかける。東京電力の協力会社に勤める父は、家族と離れ、今も深刻な状況が続く福島第一原発で働く。「話す時間はいつも五分程度。でも、安心するし、心が通う気がする。」遠くはなれた親子を携帯電話がつなぐ。

地震のときは学校近くのグラウンドでソフトボール部の練習をしていた。「バキバキバキ。」地鳴りのような音がして近くの木々が次々に倒れた。立ってられず、思わずその場にひざまずいた。家族に何度電話をかけてもつながらない。自転車で急いで家に向かうと、大渋滞と陥没した道路が続いていた。

家族は全員無事だった。家も食器棚が倒れる程度で済んだ。だが、約一週間後、父に会社から招集がかかる。原発での電気の復旧作業だった。「被ばくしたら、その時はその時。」父は笑顔で家を出た。見送る母圭子さんの肩は小刻みに震えていた。

間もなく自宅が屋内退避区域に入る。母と弟の茂幸君、祖父充さんとともに福島市に自主避難することになった。父にも来てほしかったが、「仕事がある。」と残った。

父は自宅から約三十キロ離れた福島第一原発に通い、防護服を着て懸命に復旧に当たっている。原発事故は事態がなかなか収拾しない。ニュースで「放射能」や「被ばく」という言葉を耳にするたびに、心配になる。

夜、どちらからともなく電話をかけ、お互いの無事を確認する。「(今は)お前が大黒柱なんだ。家族を頼んだぞ。」父がいつも冗談交じりに話していた言葉が、震災が起きてからは本気に思えた。避難所の暮らしは心細い。短い電話のやりとりが心の支えになっている。

最初に避難した福島市の体育館で母が体調を崩した。「家族を頼む。」－。父の言葉を思い出し、必死に看病した。母に代わって弟と祖父の身の回りの世話もした。マスクの配布や食事の準備、小さい子供の相手－。ボランティアも自分から買って出た。

避難所は体育館から高湯温泉の旅館に移ったが、父と離れ離れの生活は今も続く。危険を伴う現場で作業する父を見て、「人の役に立つ仕事をしたい」と思う。消防士になるのが夢だ。「お父さん、こっちは大丈夫だよ。」避難所で家族を守りながら、父の無事を祈っている。

参考文献：「東日本大震災 心をつなぐニュース」 編者 池上 彰＋文藝春秋 P96より引用。

編集後記

何度も恐縮ですが、本号は記念すべき300号です。私自身、この編集後記は10本目です。センターニュースの編集に係わるようになって既に8年が経過しています。中味を振り返ると試行錯誤の連続というのが偽らざる心境ですが、一方で我が人生にパンチの効いたスパイスを振り掛けてくれているように思います。

センターニュースが皆様の生活に一滴の潤いとなることを願って編集にいそしんでおりますが、実のところ皆様ご自身の投稿、参画が何よりのスパイスになるものと信じております。何卒よろしくお願い申し上げます。

ところで、皆さんは『翼状片（よくじょうへん）』という目の異常をご存知でしょうか。白目の表面を覆っている結膜が過剰に増殖していき、黒目に覆いかぶさる病気です。沖縄の農業関係の方に多くみられるとのこと。この病気に私自身が罹患してしまいました。2年ほど前に極小さな白斑が黒目と白目の境にできているのに気づきましたが特に異常も無く、放置しておきました。去年末に白斑が大きくなっているのを自覚して眼科に行きました。

医者が開口一番、『本田さんはゴルフをされますか？』。ゴルフはしませんという私の返答に続いて、太陽の下に長時間いませんかという質問がきました。土日はサッカー、特に少年サッカーは一日中太陽に照らされていることを申し上げたところ、たちどころに『翼状片です』。『特効薬はありません、大きくなったら手術で削除しましょう』。『とにかく直射日光を避けることです』、という所見を頂きました。職業病（生活習慣病？）とあきらめ、太陽の下ではサングラスを掛けています。

ゴルフが趣味という方も多いと思います。今年の夏も厳しい暑さと直射日光に悩まされますが、皆様、目をいたわることをお勧めします。どうぞ転ばぬ先の杖でお過ごし下さい。

(本田 記)

発行 協同組合 関西地盤環境研究センター
〒566-0042 摂津市東別府1丁目3番3号
TEL 06-6827-8833 (代)
FAX 06-6829-2256
e-mail tech@ks-dositu.or.jp

編集 情報化小委員会
編集責任者 中山義久
印刷



<http://www.ks-dositu.or.jp>